

『月にハミング』

マイケル・モーパール／作 杉田七重／訳 小学館

933

モ

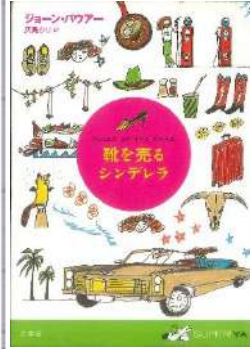


イギリスのブライアー島が舞台。主人公の学生アルフィ・ウィークロフトが釣り場を探しに海へ繰り出、近くの無人島で少女を発見するところから物語は始まります。島に取り残された女の子の情報は無く、謎は深まるばかりで島中大騒ぎです。ウィークロフト家はその少女ルーシー・ロストを家族として迎え入れます。話の中で何度も出てくるモーツァルトの曲「アンダンテ・グラツィオーソ」はタイトルの意味とルーシーを知る上でカギとなります。

『靴を売るシンデレラ』

ジョン・バウアー／著 灰島かり／訳 小学館

バ



女子高校生のジョナは、持ち前の高身長をいかしてバスケットボールチームに所属し、プレーしていましたが二軍に降格、学校の成績も振るわずじまいです。そんな自分に嫌気が差し、気分を変えて、靴店でバイトをすることに。販売員として苦労がありながらもやりがいを見い出します。ある時、店舗視察のためオーナーから車の運転手として夏休み限定で雇われます。オーナーとジョナの凸凹コンビの6週間、2600キロに渡るドライブは無事にゴールできるのでしょうか！？

『少年弁護士セオの事件簿1』

なその目撃者』

ジョン・グリシャム／作 石崎洋司／訳 岩崎書店

933

カ



主人公のセオが住む町では、町で起こった殺人事件の裁判の話題で持ち切りです。ほかならぬ中学生のセオもそのひとり。彼は法律家を夢見、少年弁護士として学校をフィールドワークに法律相談に乗っているのです。ある日友だちの相談に耳を貸していると、あの殺人事件と関係していることが発覚。しかもその情報は裁判関係者も知らない内容です。セオの目線で事件や裁判過程が語られ、法律関連の単語も分かりやすく解説しています。裁判で事件のあらましを訴える側と弁護側の双方が説明する冒頭陳述のシーンはその場に居て聞き入ってしまうような感覚です。

海外の小説って難しそう…と思っている人にもおススメです!!読み始めたらユーモアや、センス、カッコいい&素敵な表現がいっぱいでハマっちゃいますよ!

# 海外文学特集



『ぼくだけの山の家』

ジョン・クレイグヘッド・ジョージ／作 茅野美と里／訳 偕成社

ジ



少年サムは、自分だけの自由に過ごせる場所を求め、キャツキル山脈で一人暮らしを始めます。大木の根元を切り開いて木の中に家を作ります。サバイバル知識のほとんどを、これまでに読んだ本から得た本が大好きなサムです。それらの情報を元に野草を摘み、魚を捕って食料を調達して行くのでした。お湯を沸かす道具が手元にないのですが、サムが本から得た知識でチャレンジするシーンがあり、そんな方法あるの!?とちょっと疑ってしまいました。結果は読んで確認してみてくださいね。

『サカナ・レッスン 美味しい日本で寿司に死す』

キャスリーン・フリン／著 村井理子／訳 CCCメディアハウス

936

フリ



料理家のアメリカ人キャスリーン・フリンが日本へ赴き、日本食にまつわる体験談を記した本書。日本料理やそれらに登場する食材に馴染みのない料理家のユニークな感想がエッセイで綴られています。料理家というと、何でも上手に調理できるようなイメージがあるのですが、著者フリン氏が魚をさばくことが苦手だと告白しているのには驚きです。日本料理を習う場面で、鮮魚をさばこうと格闘する描写は、料理が得意ではない人も思わず共感してしまうかもしれません。料理好き、そうでない人、これからチャレンジする人にも推したい一冊です。

『キツネのボックスー愛をさがしてー』

サラ・ペニーパッカー／作 ジョン・クラッセン／絵 佐藤見果夢／訳 評論社

933

ペ



戦争で疎開することになった12歳のピーターはペットのキツネ、ボックスを森に帰します。けれど、危険で天敵が住む森に置き去りにしたことを後悔し、迎えに行くことを決心します。ボックスの元へ徒歩で7日間350キロの距離を強行する計画。ピーターは迎えに来ると信じるボックスに再会できるでしょうか? ペットフードしか食べたことがないボックスが生きたエサを食べようと挑戦するシーンは、生きてピーターに会いたいという強い気持ちが伝わってきます。長い道のりをそれぞれの視点から描く冒険譚です。